

消滅と痕跡

——小川洋子「人と人が出会う手順」

黄 亜 蘭

1 出合いの難しさ

小川洋子「人と人が出会う手順」(「小川洋子の my memorabilia」「私」の中の愛おしい記憶「Donami」二〇〇八・六、のち『カラーひよことコーヒード』小学館文庫二〇〇九・一二、『国語総合』数研出版二〇〇三・一で教材化)は、「孤立感に涙する時間や効率の悪い作業や「私」が出会った祖母そっくりのガイドさんのように神様の気紛れとしか思えない偶然の果てに巡り合った仲間の方が味わい深い。そこには人が出会う手順が踏まれている」という趣旨のエッセイである。

しかし、孤独な収集家の少女、灯台守を研究する人や、神様の気紛れとしか思えない偶然を求める人が望む出合いは、たやすく訪れてこない。その前に色々を耐えなければならぬ。

小川洋子は「ひよこトラック」(『海』新潮文庫二〇〇九・三)で、物言わぬ抜け殻収集家の少女と仲間のいない初老独身男性との交流を描いた。「孤立感に涙する時間」^②を耐えながら、孤独な少女は誰かとの出合いを待っていた。「仲間と出合いたいけ

れば、ポスターを描き、一枚一枚糊で貼り付けてゆくくらいしか方法がな」い灯台守研究会の人も同じである。破れかけたポスターを頼りに、仲間との出合いを待っている。が、望んだ出合いに出会う可能性の低さに想像が付く。抜け殻収集家の少女と灯台守研究会の人には共通点がある。それは「効率の悪い作業」をしつつ、出会うべき誰かと待っていることである。

世の中に出会い方は様々である。キーボードのボタンをクリックすることで出会った仲間もいれば、孤立感に涙する時間や効率の悪い作業を通じて、巡り巡って、出会うべき誰かと出会えた人もいる。涙にする時間や効率の悪い作業を我慢しながら、出会うべき誰かと出会う瞬間は「自分の中に持っている強い意志が他者のそれと触れ合う瞬間」^③である。それこそが「私」の言う「人と人が出会う」に相応しい手順」^④がきちんと踏まれていることである。

本稿はそのような出合いの難しさをふまえて、出合いを支える家族的類似性及び小川洋子作品の消滅と痕跡のモチーフを分析する。

2 家族的類似性と出会い

本エッセイの冒頭部では「自分の頭の中だけで作り上げた、現実を超越した小説だ、と自惚れているのは作家だけで、実際の世界では常に、作家など思いも及ばない物語的な出来事が起こっている」と書いてある。小川洋子は「生きる」とは、自分の物語をつくること」のあとがきで、「無関係だったはずの出来事が知らず知らずのうちに結びつき、想像を超えた発展を見せる。人生は物語みたいだなあ、とふと思う」と語っている。セミの「抜け殻」というささやかな言葉に結びつく「私」とガイドとの出会いはまさに「思いも及ばない物語的な出来事」の伏線である。

「抜け殻」収集家の小説を書き終えたあと、「私」はザルツブルクへの旅先に祖母に雰囲気のそっくりなガイドと出会う。ガイドが小さい頃セミの「抜け殻」を収集して、セミの形のチョコレートの箱に入れて弟を騙したという話を聞いたとき、こんな偶然があるのかと思うほど不思議な気持ちになった。

「私」とガイドと祖母との間には、共通する特徴がない。しかし、「私」とガイドの間は「抜け殻」という言葉で繋がりが、ガイドと祖母の間はそっくりな雰囲気（静かな口調や、はにかんだような微笑む目元）で結びつき、「私」と祖母の間には血縁関係があり、同じ記憶を共有している。このように共通な言葉（「抜け殻」）、似たような雰囲気などで、「私」とガイドと祖母の間でそれぞれ部分的に重なりあっている。この三人の関

係はいわば家族的類似性である。部分的に重なり合うところがあってこそ、「私」はガイドと祖母と繋がられ、記憶の中で「私」たち三人は仲間になることができた。たまたま偶然な出会いがそういう重なり合うことよって、忘れられないものとして永遠に心の中に残していく。まさに「思いも及ばない物語的な出来事」である。

3 消滅と痕跡のモチーフ

中村三春氏は、小川洋子の作品には、「ほとんど例外なくと言ってよいほどに、何らかの物・対象に対する偏愛がつきまとう。その細やかなアイテムは、換喩原理によって物語的な意味をもち、その意味とは、死んだもの、今は消滅してしまったものの記憶にほかならない」と考察し、「消滅するアイテムが、その背後に本来の所有主を喚起するような換喩的対象となっている」と指摘している。

本エッセイに出てくる「抜け殻」は既に本体を失ったもの、失われたもの、また過去の記憶を象徴するものと考えられる。消滅していくものは本エッセイ、さらには小川作品の共通点である。「抜け殻」はそもそも本体を失った空っぽなものである。「私」の描いた「抜け殻」を収集する少女は「抜け殻」を「そのままの形で静かにそっと鑑賞することで、そこにはない、失われたものをみつめていた」のである。もちろん、「抜け殻」その自体に興味を持つ人もいるが、彼らは空っぽになった「抜

「抜け殻」をただ見つめている孤独な少女とは違い、失われたものへの思いが欠いている。

「抜け殻」が失われたものや過去を象徴するように、本エッセイの中で過去や失われたものの要素は容易に見つけられる。最後の出会いや灯台守研究会のポスターのことは全て「私」の昔の記憶である。

また、灯台守について、実際この小説が書かれる少し前に、灯台守という職業が姿を消している。二〇〇六年五月六日の『朝日新聞』には、近く無人になる女島灯台についての記事「灯台守 消えゆく」が掲載されている。つまり、灯台守は「抜け殻」のように失われたものになってしまったのである。それでも、「私」はまだ「一枚の破れかけたポスターを頼りに、出会うべき誰かと出会い、灯台守の文献を調べたり、各地の灯台を訪ねたりして、絆を深める様子」を想像している。

灯台守は確かにもう「抜け殻」のように本来の姿が消えていたが、研究を続ける人はそれに関する資料を調べたり、灯台を訪ねたりすることで、灯台守が実在する痕跡を探し出すことができる。失われたものはそのまま消えてしまうだけではなく、残されたものを手掛かりにして、本来の姿を見つけ、実在した痕跡をたどり着くことができる。

「私」とガイドの間に共通する「抜け殻」をモチーフにした作家の話と現実の話が対置されている。ガイドが祖母に似ていることから、より奇妙な雰囲気漂う。ガイドがいう「抜け殻」

はセミの「抜け殻」（セミの形をしたチヨコレート）である。指導書によると、ヨーロッパではセミは神聖な生き物で、長い地中暮らしの末に地上で羽ばたく様子は「復活・再生」を意味したため、成虫のセミの形をしたチヨコレートは幸せを呼ぶものとして好まれていた。しかし、日本では、七日間しか地上で生きることが出来ないといわれるセミは、文学作品において「はかない」というイメージが定着したという。そういう「はかない」イメージは「私」とガイドとの出会いにも共感を覚えさせる。ガイドさんにも、祖母にも二度と会うことができないうと分かっているからである。

「抜け殻」はここで記憶を蘇らせる機能を果たしている。「夏の終わり、セミの抜け殻を見るたびに、私は名前も知らないガイドさんとなくなった祖母のことを思い出す」という文から、「私」にとつて、セミの「抜け殻」は記憶の中の出会いを呼び起こすツールとなっている。ここでいう記憶はガイドとの出会いだけではなく、ガイドを通して祖母との記憶、またガイドと弟との記憶も含まれている。

「私」にとつて、亡くなった祖母はもういない人物であり、記憶の中の人物でしかない。が、祖母に雰囲気そっくりなガイドを見ると、思わず祖母のことを思い出す。小川洋子の他作品の祖母についての記述では、祖母はいつまでも思いやりのある優しい人である。ガイドの「静かな口調や、はにかんだような微笑む目元」は優しいという言葉に通じている。「そして、「抜

「私」は自分のことを
祖母とガイドと重ねた。「抜け殻」を媒介として、「私」とガイ
ドと祖母が繋がった。

「私」は祖母ともう二度と会えない。「神様の気まぐれとしか
思えない偶然の果て」に出会えたガイドにも会うチャンスは再
び訪れない。しかし、セミの「抜け殻」を見つけたときに、「私」
は「この名前も知らないガイドさんを思い出すに違いない。そ
して祖母の口調や微笑む目を思い出すだろう」と。「神様の
気まぐれとしか思えない偶然」を経て、「私」は亡くなった祖
母のことを思い出す、祖母が生きた痕跡をたどり着き、ガイド
との出会いも何度も何度も思い返すのである。消滅したものや
過去に返したものはそのまま永遠に消えてしまうわけではな
い。それが実在した痕跡を探し出し、実在することを証明する
ことができる。

4 まとめ

中村氏は「文芸とは、死んだ者の声、あるいはいはずれ死にゆ
く者としての書き手の声を、想像力と解釈による解読し、また
変異させることによって復活させ、同時代に、また後代に伝え
る⁽¹⁾」と捉え、「文芸が生核心となるような人間とは、まさに
生きる事によって死者を生き、生きることで死を生として実
現する⁽²⁾」と説く。あるものを媒介として、何度も何度も繰り返
し、受け継がれていく。

「孤立感に涙する時間」を一人で過ぐす少女はその消えてゆ
く時間を繰り返し、孤独を耐えている。過行く時間を涙こらえ
ながら、そこに感じたものを味わう。「効率の悪い作業」をし
ていた灯台守研究会の人は消えていた灯台守を研究し、灯台守
が実在する痕跡を探し出し、証明している。「神様の気まぐれ
としか思えない偶然」を経て、不思議な出会いをした「私」は
「抜け殻」という一言で、亡くなった祖母と祖母の雰囲気こそつ
くりなガイドさんのことを何度も「抜け殻」を見つけたときに、
思い出す。消えてゆくもの、実在しないもの、過去になつたも
のはそのままなるわけではない。ある媒介を介して、行動
や記憶を通して、いつまでもよみがえらせ、そして受け継がれ
ていく。

註

(1) 無署名「小川洋子「人と人が出会う手順」(『国語総合教授資料』
数研出版二〇一三・三) 一三頁。

(2) 前掲「小川洋子「人と人が出会う手順」」一六頁。

(3) 前掲「小川洋子「人と人が出会う手順」」二〇頁。

(4) 小川洋子・河合隼雄「生きるとは、自分の物語をつくること」(新
潮社二〇一三・二) 一四三頁。

(5) 中村三春「小川洋子『アンネの日記』——「薬指の標本」「ホテル・
アイリス」猫を抱いて象と泳ぐ」など——(『北海道大学文学研究
紀要』二〇一六・七) 一〇二頁。

- (6) 前掲「小川洋子『アンネの日記』——「薬指の標本」「ホテル・アイリス」『猫を抱いて象と泳ぐ』など——」一〇一頁。
- (7) 前掲「小川洋子「人と人が出会う手順」二三頁参照。
- (8) 前掲「小川洋子「人と人が出会う手順」二〇頁参照。
- (9) 前掲「小川洋子「人と人が出会う手順」一五頁。
- (10) 前掲「小川洋子「人と人が出会う手順」一八頁参照。
- (11) 前掲「小川洋子『アンネの日記』——「薬指の標本」「ホテル・アイリス」『猫を抱いて象と泳ぐ』など——」一一八頁。
- (12) 注11に同じ。

(こ)う・あらん 上海大学外国語学院日本語学科修士課程)